

なごや 戦災復興の物語

…名古屋の街はこうしてつくられた…

池田 誠一

【12】 廃墟からの選択…語り伝えたい物語

1 「復旧」と「復興」

歴史に「もし…」は無意味だといわれます。しかし仮に名古屋の街が、戦災からの「復旧」でスタートしたら、今日どんな姿になっている

たのでしょうか。

道路は、大正時代の都市計画を基に順次造られていると思いますが、今のような規模ではありません。何よりも、都心の区画街路の多くが5、6m幅のままだったでしょう。もちろん百米道路はありません。市街地には墓地が点々と残り、道路は迂回を強いられました。中心部には公園もほとんどできなかったでしょう。地下鉄の建設や中央線の立体化は、用地の確保のために10年から15年は遅れていました。…そこにあるのは、密集した市街地と慢性的な交通渋滞だった…といえそうです(図1)。

災害の後は、復旧を急ぐ世論から、「早くしろ」と行政の責任を追及する声が出てきます。そんな中では「将来の大計」などは後回しになりかねません。また実施段階になると進捗を急ぐあまり、「しょうがない」という妥協が連続します。ところが名古屋の戦災復興では、将来の大計を志し、その多くを達成したのです。連載の終りにあ

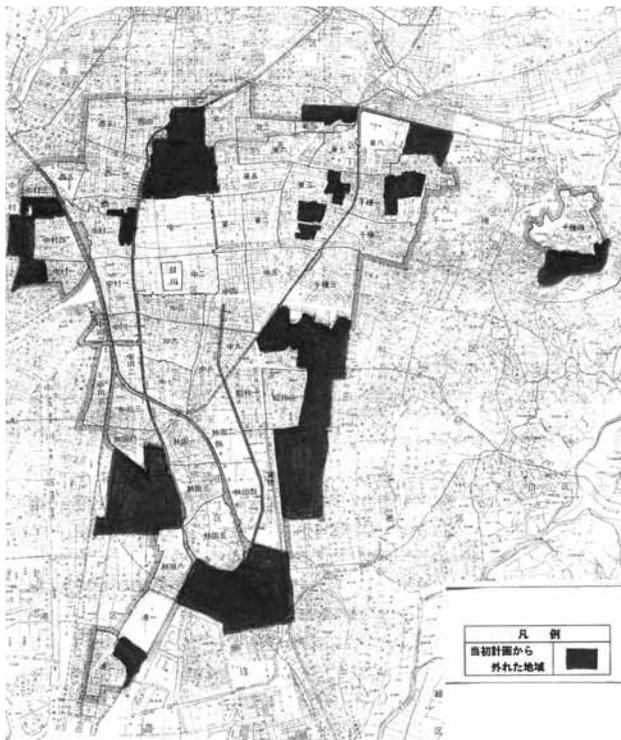


図1 計画区域から外された地域の中には現在も密集した市街地が残っている

たり、名古屋がなぜそのようなことができたのかを整理しておきたいと思います。

2 天と、地と、人と

物事の実現には、よく孟子の「天の時・地の利・人の和」ということが引かれます。名古屋の戦災復興を考えると、まさに、そのことがあてはまるように思えます。

(1) 天の時…戦災

まず一つ目の「天の時」は戦災です。それは都市にとっても大変な災難でした。しかしながら一面の焼け野原は、見方を変えれば新しい街づくりの絶好のチャンスでもあったのです。廃墟のような市街を前に、佐藤市長が誓った「復旧ではなく、復興しなければ…」という決意が、名古屋の戦災復興の始まりになりました。

それは、即、難事業になる都心部の区画整理を行うという決意につながり、終戦の1ヶ月後には国に先立って建築規制が実施されました。また議会の対応も素早く、ほぼ同時に戦災からの復興の方針が満場一致で決議され、市共通の意思となっています。名古屋市は、社会に敗戦の混乱や虚脱が始まろうとする時に、早くも「千載一遇」のチャンスを活かせと走り出したのです。

(2) 地の利…区画整理

二つ目の「地の利」は区画整理です。大きな災害から新しい都市へと復興するには、土地区画整理という方法が最も合理的で、あるいは唯一の方法といえるかもしれません。当時、名古屋はその区画整理の先進都市でした。明治末から始まった耕地整理の動きは一気に広がりました。そしてそれを大正末から昭和初めに市街地整備の手段として促進したのが石川栄耀氏です。氏は土地経営論を主張し、区画整理で所有者に大きな利益をもたらしていました。区画整理の実施には、まずその方法に

対する土地所有者や関係者の理解が不可欠です。名古屋にはすでに戦前により成功体験があったのです。

また区画整理事業は実施方法が複雑で、その専門家や技術者を必要としました。この面でも先進都市だった名古屋は、多くの人材とノウハウを持っていました。「先手必勝」と名古屋が動き出す素地、いわば地の利が、そこにあったといえます。

(3) 人の和…「志」

三つめの「人の和」は関係者の志が一致していたことでしょう。禍を転じて福と為す。市会の決議文でいえば、この敗戦を乗り越えて新興名古屋市を建設しようとする志です。それは市会や市長ばかりではありません。市職員はもちろん、多くの市民も同じ気持ちでした。そしてその中心に復興事業の責任者になる田淵寿郎氏が着任したのです。

小説『新しい鯨』中に、終戦直後に測量機器を買い集めた職員の話が紹介されています(文献①)。その人は、なんと終戦1週間後に区画整理のための機器の買い集めを提案し、実行したのです。市は全職員が燃えていました。そして一面の焼け野原の中に田淵氏を中心に、行政から市民まで「転禍為福」の志を共有した人の和ができあがったのです。

3 戦災復興の意味

(1) 事業の検証

名古屋の戦災復興には批判もありました。指摘されていたものは、おおよそ次のようなものがあります。

- ①道路が広すぎる
- ②街が直線で、単調だ
- ③古い情緒がなくなった
- ④由緒ある地名が消えた
- ⑤公共用地を取りすぎた…など

このうち、②は江戸時代からの碁盤割に起因するものであり、③は戦災でほとんどが焼けていました。それでも残ったビルなどは曳き家されており、後まで残っていました。

①の道路が広すぎるといのは将来の都市像をどう見るかであり、⑤の公共用地のとりすぎは、事業の最初の工区で決まったようです。そこで、自動車時代の都市像を想定したこと、換地計画を中区の中心部から始めたことは、当時としてはやむを得なかったのではないのでしょうか。そして結果的には、その余剰空間の多くが今日では歩道や広場等になって、都市の安全や潤いに貢献しています。

また④の由緒ある地名の変更には、当時も多くの議論がありました。従前の地名が複雑すぎたこともあります(図2)。が、現実には区画整理の終了には住居表示法による新しい住居表示が義務付けられていたため、割り切らざるを得なかったようです。

全体としてみれば、名古屋の戦災復興は、内臓が疲弊し故障しかけていた街を、区画整理という外科手術によって救い、新しい近代的な都市に造り変えたといえるでしょう。

(2) 実行した人達

最後に、名古屋の戦災復興を成し遂げた人のことについてまとめておきたいと思います。

この事業は、初期に3人のキーパーソンが存在しました。1人目は最初の決断者の佐藤正俊市長です。2人目はその決断を支えた議会の代表である塚本三議長です。そして3人目は、市長から三顧の礼で迎えられ、復興のリーダーになった田淵寿郎氏です。この方の力で戦災復興の構想が大きくなり、また実施に当たっても妥協を排することができました。

しかしながら、これらの人の思いを現実に現場で成し遂げたのは、多くの市の職員でした。計画はそのレベルが高ければ高いほど、実現には大きな知恵と労力が必要になります。市の職員は、知恵を集め、汗をかくて、計画を守り通したのです。

もう一つ忘れてはならないことは、当時の市民のことでしょう。戦災復興で苦労した他の都市では、多くがこの市民の理解の段階でつまずきました。利害を伴う区画整理という事業を受け入れ、時には市を叱咤激励した当

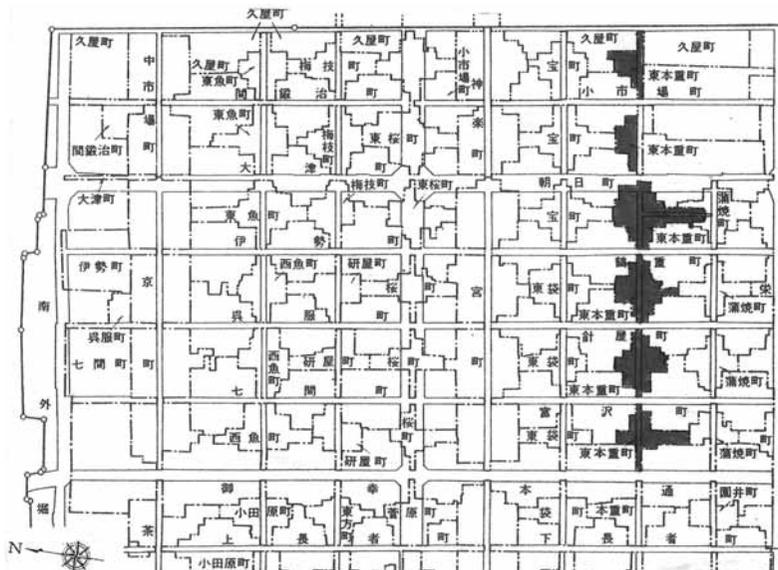


図2 戦前の米の北の町名。縦の町名と横の町名が交差している(例：東本重町)

時の名古屋市民も、事業の成功の一翼を担っています。

孟子の教えでは、「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」とあります。名古屋の戦災復興は、つまるところ、この佐藤市長に始まり、市職員や多くの市民の「人の和」が成し遂げたといえそうです。

4 復興記念館へ

… 金山の名古屋都市センター …

紀行の最終回は、金山にある復興記念館です。金山はまさに戦災復興でつくられた街といえます。名古屋駅の過集中の受け皿として、また市域の中心点としても注目され、名古屋のサブセンターへの道歩んでいます。

平成11年、その駅の南側に、戦災復興を記念した高層ビルができました。名古屋ポストン美術館や高級ホテルが誘致されましたが、その中核になるのは名古屋都市センターです。

金山総合駅の南口を出て、右側の高層の金山南ビルに入ります。1階はポストンコモンをイメージした共通空間で、その真ん中に都

金山南口広場と金山南ビル



復興記念館の標示。生け花展が開かれていた



11階の南の喫茶室。本を読んでいる人もいる

市センターへのエレベーターがあります。11階で降りると正面通路の左側の壁には、白地に「復興記念館 名古屋都市センター」と浮き出しています。奥に進むと正面がホール、左側は展示コーナーと喫茶。右側は、名古屋都心を一望する広場です。窓からは、眼下に金山総合駅。左には名古屋駅の高層ビル群、右には遠く御岳山まで見渡せます。床は大きな名古屋の航空写真が張られており、周りには名古屋の都市づくりの過去・現在・未来が説明されています。

その奥の階段を上ると12階はライブラリーです。誰でも、無料で利用できる全国でもトップのまちづくり専門図書館です。中に入ると左奥に、名古屋が誇る「区画整理」と「戦災復興」に関する資料が集められています。点々と本を読み、資料に目を通している人が見えます。明日の名古屋の街は、ここから芽生えていくのかもしれませんが。



12階のまちづくりライブラリー。6万冊の蔵書がある



眼下に金山総合駅が見える

5 廃墟からの選択

さて、12回かけて名古屋の戦災復興の姿を描いてきました。膨大な事業であり、当然のことながら、これだけで語りつくせるものではありません。しかし、名古屋の街の多くが、この戦災復興の中で造られたと言うことは、おおよそご理解いただけたのではないのでしょうか。

終戦の後、全国115都市で一斉に戦災復興の事業が始まりました。東京では当時の知事が計画的な事業には否定的でした。このため予算も削られ、結局実施されたのは、当初計画の6割でした。大阪も基本のスタンスが戦災の復旧だったようで、大きな成果にはなりませんでした。

都市の基盤(インフラ)を造ることに金は時間も掛かります。今日では土建屋の発想と片付けられがちですが、都市の基盤というのは、金山のように、その後何十年もたって、いやちょっとすると百年以上経ってから、その効果が出てくるものなのです。

*

戦災によって一面焦土と化した廃墟を前にして、いくつもの選択肢がありました。復旧か復興か。生活保障か基盤整備か…等々と。その時、苦勞をも省みず、50年先の名古屋の街に思いを馳せた人達の心。私達はもっと後世に語り伝えていかねばならないと強く感じました。

〈完〉

〈主な参考文献〉

- ①村松喬『新しい鯨 日本人の記録』(1964、毎日新聞社)
- ②伊藤徳男『名古屋の街 戦災復興の記録』(1988、中日新聞本社)
- ③市計画局編『名古屋都市計画史』(1999、名古屋都市センター)
- ④越沢明『東京の都市計画』岩波新書新赤200(1991、岩波書店)

連載を終えて

今日の名古屋の街は、多くが戦災復興でつくられました。しかし戦後60年、そのことはほとんどの市民の頭から消えていきました。

その物語を、一般の人にも読みやすく書き留めておこうとこの連載を始めました。もとより力不足は想定内でしたが、毎回まとまるかどうか、不安の連続でした。

最終回を閉じて、改めて、大構想を実現した、当時の諸先輩方に頭を下げる次第です。

* 次回からは「中部新国際空港の物語(仮)」を始めたいと思っています。